As the surface pattern of this new species is quite unique, there are no similar species of *Xylotrechus* in Japan and adjacent regions.

This species name is denominated in honour of Mr. Masatoshi. TAKAKUWA who is the collector of the interesting species.

Acknowlegements

The author is greatly indebeted to Mr. Masatoshi TAKAKUWA who kindly gives the opportunity to study the valuable material and also to Mr. Hiroshi FUJITA for the preparation of the photograph accompaning the present paper.

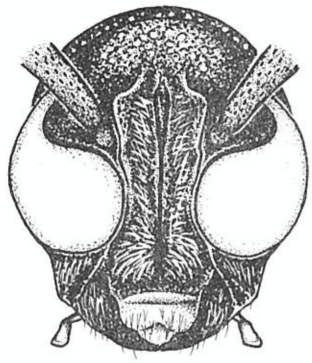


Fig. 2 Frons of *Xylotrechus takakuwai* sp. nov.

摘　　要

新種 *Xylotrechus takakuwai*（ミイロトラカミキリ）の記載（Figs. 1, 2）。本種は1976年6月23日，小笠原諸島母島の乳房山山頂（標高約400m）で，高桑正敏氏によって採集された1♂が知られているのみである。前胸部に黄色斑，上翅は基部が鮮やかな赤褐色であるのに加えて，3つの黄色斑をもっており，日本およびその近隣からは近縁な種が見当らない。

前頭には，きわめて明瞭な角稜が認められ（Fig. 2），*Xylotrechus* 属に含まれる種である。

稿 KŌCHŪ 虫

コナガキマワリの記録

今坂　正一

コナガキマワリ *Strongylium helopioides* LEWIS は，1894年に G. LEWIS によって長崎産の標本を基に記載された種であるが，中根猛彦(1972)[1] によると，その後の採集例は報告されていないようである。

筆者は長崎県雲仙岳において，枯枝(直径3～4 cm)のビーティングで本種を得ているので報告しておく。

1ex.，長崎県島原半島雲仙岳（標高1,200m付近），15. Ⅵ. 1976，今坂採集

本種は，中根・益本（1969）[2] のゴミムシダマシのリストではコナガキマワリという和名で，また，原色日本昆虫大図鑑Ⅰ，甲虫篇（1963）ではヒサゴナガキマワリという和名で紹介されている。

体長6.4mm。暗褐色。触角基部，各足の脛・付節，前胸背前縁は赤みを帯び，頭胸背は密に点刻される。上翅は金銅光沢を有し，点刻列を具え，間室には微細点刻が散布している。大図鑑にも書かれているとおり，本種の外見は，*Misolampidius*（ヒサゴゴミムシダマシ属）の種によく似ている。

1) 中根猛彦（1972）：昆虫と自然，7(7)，p.18 fig. 8 d

2) 中根猛彦・益本仁雄（1969）：昆虫と自然，4(9) pp.32～34

（〒855　島原市白土町1064）

屋久島のキンオビハナノミの記録

高桑　正敏

キンオビハナノミ *Variimorda flavimana*（MARSEUL）は北海道，本州，四国，九州から記録されている。1976年，田尾美野留氏によって屋久島から本種が採集されたので新産地として報告する。

1♀，屋久島小瀬田，11. Ⅶ. 1976，田尾採集

奄美大島にはヒメキンオビハナノミ *V. miyarabi* NOMURA を産し，屋久島産のものはこの種との関係に興味が持たれたが，本州産などと特に差は見られない。

なお，九州においては現在まで福岡県下からのみ採集されているようだが，熊本県祖母山の採集例があるのでここに記しておく。

1♀，熊本県祖母山，21. Ⅶ. 1968，酒井香採集

以上の標本は筆者が保管している。標本を恵与された酒井・田尾両氏，ならびに北九州のハナノミの資料を恵与された高倉康男氏に厚く感謝申しあげる。

（〒236　横浜市金沢区六浦町 3577）

ツシマムツボシタマムシ宮城県に産す

田村　隆宏

ツシマムツボシタマムシ *Chrysobothris samurai* OBENBERGER は対馬から記載され，近年になって本州（広島県，岡山県，福島県いわき市）および九州（大分県飯田高原）から発見されて話題を呼んでいる。筆者は宮城県白石市東白石産の本種を見いだしたので，日本における北限記録かと思い報告する。

1♀，宮城県白石市東白石，27. Ⅵ. 1976. 鈴木採集

この個体は4紋型の f. *samurai* である。

なお，黒沢良彦博士は1975年にツシマムツボシタマムシの学名 *C. tsushimae* を，樺太の *C. samurai* の学名のシノニムとし[1]，*tsushimae* は6紋型のツシマムツボシタマムシの型名として残している[2]。

本種の同定に当っては，藤田宏・秋山黄洋両氏にお願いした。

1)　Y. KUROSAWA (1975): Bull. Natn. Sci. Mus., **1**(1), pp.73〜74

2)　黒沢良彦（1976）：甲虫ニュース，No.33, p.10

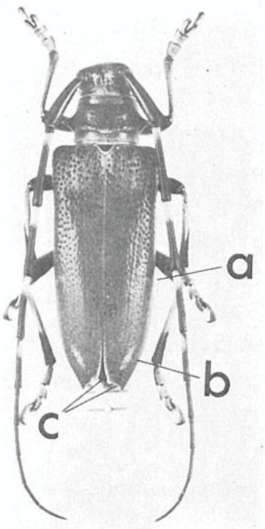
（〒180　武蔵野市吉祥寺本町 2-33-18　ときわ荘
丸岡堅二方）

白紋のあるヤエヤマフトカミキリ

森島　直哉

沖縄県西表島にて，上翅に白紋のあるヤエヤマフトカミキリ *Blepephaeus yayeyamai* BREUNING を採集した。本邦からは現在5種の *Blepephaeus* が知られているが，上翅に斑紋を有するのは，石垣島特産のイシガキフト1種で，ヤエヤマフトに白紋の出る個体があることは今までに知られていなかったことと思われる。

1♀，西表島カンピラの滝，14. Ⅴ. 1976.



写真のように上翅の翅端近くに一対の明らかな白紋を備え（b），目立たないが，上翅中央よりやや翅端よりの側縁部にも小さな一対の白紋が見られる（a）。また，翅端部および会合線上の後方⅓にも白色微毛が密生している（c）。

筆者は西表島産のヤエヤマフトはこの1個体のみしか検していないが，石垣島のものに比べ黄褐色の微毛が多く，写真の示すよう触角第2〜4節の基部，中・後脛節の基部の白色微毛は著しく密で発達しており，翅端の形（*Blepephaeus* 属では同一種でも変化の幅が大きいが）も内角はほとんど尖らず，イシガキフトのそれに近い。

（〒321-14　日光市花石町1823）

三宅島5月上旬のカミキリ

藤田　宏・小笠原　隆

伊豆諸島における甲虫相の調査は，最近御蔵島が脚光を浴びたことなどから，以前より多くの人々が訪れるようになったが，まだまだ場所・時期・採集法共に片寄っている傾向にある。

筆者らは1976年5月8〜9日にシイの花に集まるカミキリを求め，三宅島を訪れた。南西諸島の島々では，3〜4月に咲くシイの花に多くのカミキリが集まるが，それらの種の多くは他の時期，他の採集法では得にくい。伊豆諸島のシイの花にも同様に，未記録の，あるいは未知のカミキリが集まっているのではないか，という予想のもとに，大路池畔のシイ原生林を訪れたが，池の周りのシイはあまりに大木すぎて，木に登ることさえできないという状態であった。ちょうど，全島シイの花が満開で，池の周りを歩いていると，シイの花の香りでむせかえるほどであったにもかかわらず，1本もすくうことができなかった。皮肉なことに，海岸線のバス道に面した樹相の貧弱なところにあるシイの花は，皆容易にネットですくうことができたが，ヒメクロトラが非常に多いほかは，他のカミキリはまったく見られなかった。

結果的には失敗に終ってしまったが，大路池周辺のシイ花上には興味深いカミキリがいる可能性は充分にある